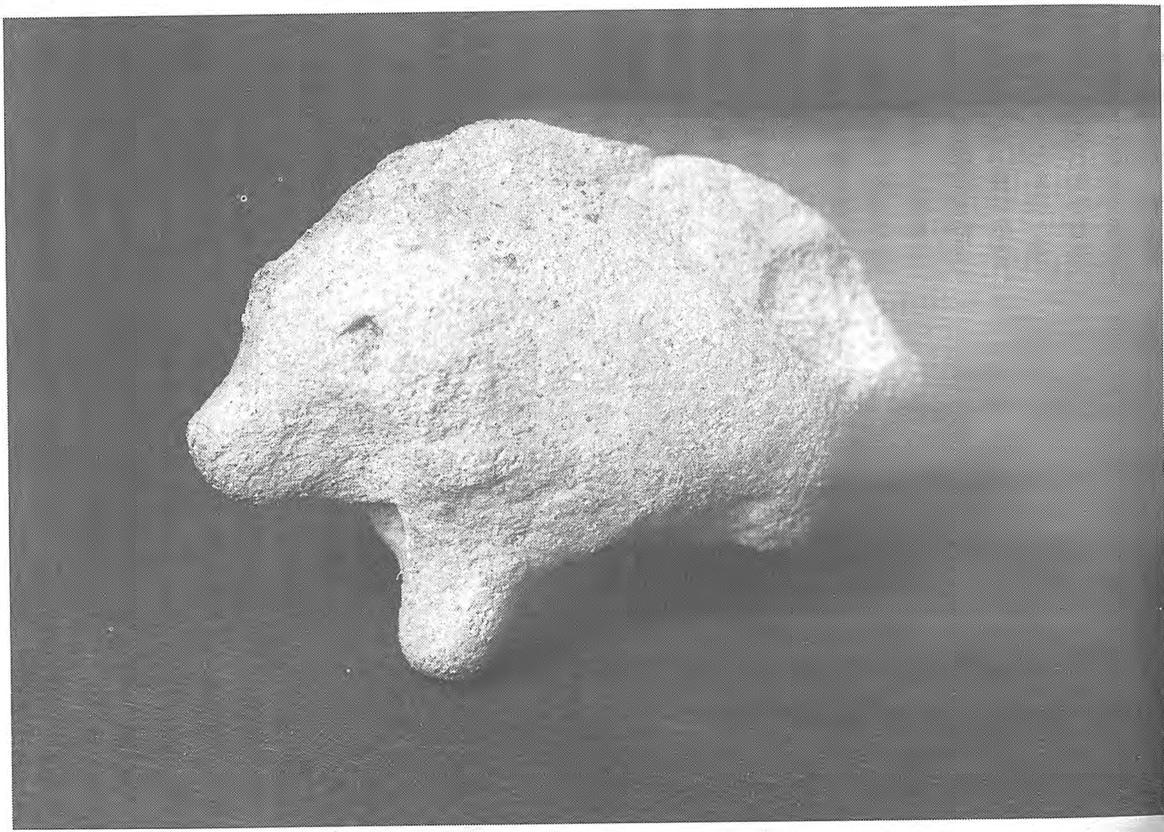
たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報　No.16　平成元年6月30日



No.471遺跡（稲城市）出土。約4,500年前の縄文人が作ったイノシシの土製品です。縄文人はイノシシやシカの肉を最も好んで食しており、この土製品もイノシシがたくさん獲れるように祈りを込めて作られたものなのでしょう。全長はわずか4㎝程ですが、イノシシ形の土製品としては日本最古のものです。

ひと昔を考える

新緑から濃い緑と早くも夏近しの感である。多摩センター駅周辺の大形ビル建設は急ピッチで、今秋にはいくつかがオープンする。

センターの「縄文の村」No.57遺跡が都の史跡に指定された。ニュータウン遺跡群の第1号である。もっともっと増えると喜ばしいことであるが……。

それにしても、10年前の景観は、ここへきて一変した。南大沢団地と都立大学の建設、埋め立てられた唐木田南側の尾根幹線道路と女子大の建設、京王対小田急の鉄道駅周辺は競演の様相を呈してきた。10年後はどうなっているのだろうか。

センターの発掘調査も、かなりの成果をあげている。No.72・107遺跡など、全国的にも評判になっている。何が発見されるかわからないのが考古学の楽しみであり遺跡の面白さである。これからも期待していただきたい。

（石井則孝）

遺跡だより⑬

—多摩ニュータウンNo.339遺跡—

今回は、町田市小山町のNo.339遺跡を紹介します。

本遺跡は、多摩丘陵の南西端に位置し、相模川水系の境川に注ぐ小河川流域の谷底部と、丘陵の緩やかな南側斜面に立地しています。

南西約300mには、縄文時代後期の祭祀遺跡として著名な、都史跡「田端環状集石遺構」があります。

調査は、京王帝都相模原線建設工事と、駅舎およびその周辺の区画整理事業に先立って、昭和61年度から現在までほぼ継続して行なわれています。その結果、縄文時代から江戸時代に至るまでの多種多様な遺構と遺物が数多く発見され、土地に刻まれた先人達の生活の様子が、徐々に明らかにされてきています。

この場所に、先人の足跡が最初にしるされたのは、縄文時代早期後半（約7千年前）以降です。炉穴（屋外のいろり跡）のほか、石蒸し料理の跡と思われる集石や、動物を獲る陥穴と考えられる土坑などが多く発見されていますが、当時はまだ定住的な生活を営んではいなかった様です。縄文時代も中期（約4千5百年前）になると、何軒かの竪穴住居が作られ、小規模ながらも生活の拠点になっていたことが分かります。

しかしながら、この土地が村としての形態を整えるのは、古墳時代に入ってからです。谷に沿って6～7世紀の竪穴住居跡が6軒点在して発見され、谷戸集落の様子がうかがえました。谷部では、投棄されたと思われる大量の土器（土師器の甕、鉢、甑(こしき)、埦(わん)、坏(つき)、高坏）や、装飾品（水晶の切子玉等）も出土しています。

平安時代から鎌倉時代にかけても、数軒の竪穴住居跡や掘立柱建物跡群等が検出され、小規模ながらその傾向は続いていた様です。

江戸時代の18世紀以降になると、屋敷地の造成や水路掘削等がかなりの規模で行なわれ、地形の改変がみられます。このように限られた範囲の中でも、土地と人間の関わりは時代とともに変化しているのです。

今回の調査では、遺構・遺物の発見もさることながら、遺跡南側の低地に広がる縄文～平安時代の泥炭層の存在がとくに注目されました。この泥炭層中からは木器などの人工遺物はほとんど検出されませんでしたが、多量の木材や植物遺体・葉・種子・昆虫・骨等がほぼそのままの状態で出土しています。崩壊しやすい土質のため、安全確保でシートパイル工事を施したり湧水等の水対策など困難な調査でしたが、当地域での自然環境の変貌を知る上で貴重な資料が得られています。

（川島雅人）

縄文時代中～後期の加工木材

沖積部分の調査風景

文化財講座〈12〉

旧石器時代と人々 (2)

約3万年前にはじまる日本の後期旧石器時代（先土器時代）は、ナイフ形石器という時代特有の石器によって代表されます。ナイフ形石器は、ナイフの刃のような鋭い辺をもち、周辺を加工した石器で、槍先や獣肉を切るナイフなどに使われたようです。ナイフ形石器は約1万5千年ほどの間、多少の変化をともないながら、盛んに使われ続けます。

後期旧石器時代の中頃、約2万年前は最も寒い時期で、その後は段々と暖かくなっていきます。それにつれて、動物も大型獣であるナウマンゾウやオオツノジカは絶滅し、現在でも生存しているイノシシ・ニホンジカなどが生き残っていきます。動物だけでなく植物などの生態も温暖化とともに変化していくのですが、動物相の変化に対応してなのか、特に狩猟具などの石器も変化していきます。約1万5千年前には全面に加工して先端を尖らせた槍先形尖頭器が登場し、かわりにナイフ形石器が衰退していきます。

さらに小さな剥片（細石刃）を骨などで作った柄の両側にはめこんだ槍が登場し、全国的に広がります。

また、1万2千年前頃には、柄との接着部分にかえりや茎をもつ有茎尖頭器などが使われるようになります。前の時期に比べると、この時期は目まぐるしい速さで石器の形が変化し、やがてそれは弓矢（石鏃）へと受け継がれていくことになります。そして1万2千年前頃から縄文時代がはじまりますが、この時期は石器に限らず用具や道具に様々な形が現われます。その最大の変化は、土器の登場といえます。（伊藤　健）

見学者の声

今回は、社会科見学で訪れた小学6年生の感想文の一端を紹介します。

◎縄文人もおしゃれ？

五輪塔やナイフ形石器、槍先形尖頭器など、どんな道具で狩りをしていたのかよくわかりました。耳飾りや首飾りは、少しヒビが入り、こわれそうだったが、青・茶の色がついていて、きれいだった。「天平定食」は、玄米・食塩ぐらいしかないので、その時代には食物の種類が少なかったのかと思いました。

（稲城一小　高木純本）

昔の人もネックレスとかをつけて、おしゃれをしていることがわかったら、なんかおもしろかったです。

（日野八小　桜井智仁）

黒曜石は土の中から出てくるのかな。私は三足土器をスケッチしたけど、三足土器はどういうときに使ったのかな。

（日野八小　大江　愛）

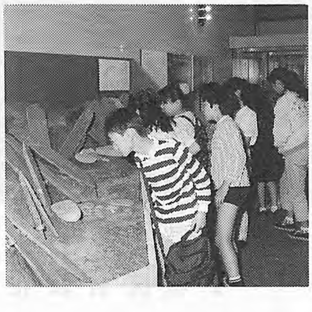
◎家の近くが映画に！

映画はとても分かりやすく説明してくれました。地層で時代がわかったり、石器・土器はどのように掘りだされるか。弥生時代には人口が減ったことなど。

（稲城一小　毛利吉宏）

映画や話は、とても参考になりました。家の近くが映画にでて、びっくりしました。あそこでも遺跡が出てきていたなんて、ぜんぜん知りませんでした。

（日野八小　稲村和絵）



◎縄文人になれたなら！

復原家屋の中に入ると、今の私たちの暮らしが、とてもぜいたくに思われ、昔の人に申しわけない気がしたことが忘れられません。

（日野八小　小林直子）

竪穴住居がいくつか復原されており、私は縄文人になった気分が味わえました。

住居の中に縄文時代の服装をして、仕事などをしているマネキンを置いたら、もっともっと迫力があるのではないかと思いました。

（稲城一小　仙北谷かおり）

◎遺跡見学会に参加して

遺跡には、土器・石槍など、たくさんの物が展示してあった。そっとさわってみた。手にじわじわと縄文時代の人々の苦労、喜び、悲しみ…が伝わってくるような気がした。縄文時代の人々が、この土をこね、焼き、使った物にさわったかと思うと、とても感激した。

（柏木小　及川理紗）

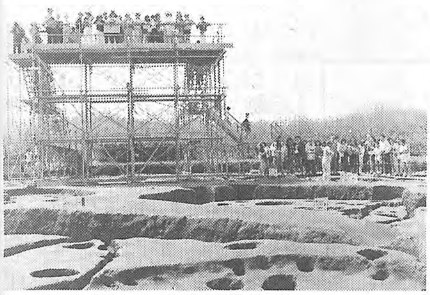
一〇七号遺跡のような大規模な遺跡をみたのは初めてです。所々にある柱穴に落ちないかと心配でした。あの大きな木をどこから運んだのか、多摩川からどうやって石を運んだのか、よくわかりませんでした。

（柏木小　山田晃子）

遺跡見学会

4月22日、多摩ニュータウンNo.72遺跡の遺跡見学会を開催しました。当遺跡は縄文時代中期の大集落で住居跡が150軒調査されています。当日は約500名の見学者がありました。

5月20日、多摩ニュータウンNo.107遺跡の遺跡見学会を開催しました。当遺跡は縄文時代・平安時代の大規模集落でもあり、特に中世末期の豪族大石氏の居館跡と推定されている場所でもあります。当日は悪天候にもかかわらず、約275名の見学者がありました。



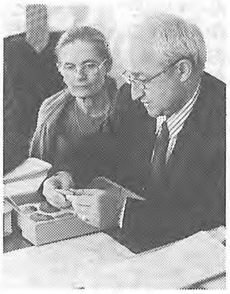
No.72遺跡見学会

ガーディンシティー多摩'89

4月28～4月30日の3日間、多摩センター駅周辺で開催されました。当センターは、28日に「縄文の村めぐり」として、縄文土器・石器・料理などの製作実演をおこない、29日は「映画の会」を実施しました。3日間の入場者は約3千7百人に達しました。

海外から考古学研究者の来所相次ぐ

フランス国立言語文化研究所日本研究センター長シフェール博士夫妻（3月12日）、ソ連邦科学アカデミー考古学研究所アスタホフ博士（4月28日）、フランス国立自然史博物館デュムレー博士夫妻（5月4日）、サウジアラビアのキング・サウド大学アンサリ博士（5月20日）、スウェーデン・ウプサラ大学オットソン教授夫妻（6月13日）がそれぞれ来所されました。



（仏）デュムレー博士夫妻

アスタホフ博士は「シベリアにおける後期旧石器の文化について」、アンサリ博士は、日本考古学協会の研究発表にあわせ、当センター会議室で「サウジの考古遺跡」というテーマで講演を行ないました。

日本考古学協会の開催

5月27・28日　パルテノン多摩、サンピア多摩の2会場で「日本考古学協会第55回総会」と講演会等（東京都教育文化財団・多摩市文化振興財団共催、東京都教育委員会後援）が開催されました。27日は「藤ノ木古墳の調査とその時代」の講演会、28日は「佐賀県吉野ケ里遺跡の調査」など20題目の研究発表があり、約3千名の研究者や一般の参加者がありました。

当センターからは、竹花宏之調査研究員が東京都教育庁雪田隆子学芸員と連名で、「多摩ニュータウン地区における古代の須恵器生産について」の発表をおこないました。

平成元年度安全衛生推進方針

平成元年度のスローガンは、〝ゼロ災害をめざし働きやすい環境づくりにつとめ　安全と健康を確保しよう〟と決まりました。今年も安全活動を重視し、新たな災害防止に努め、ゼロ災害の職場を実現するように全員で努力しましょう。

トピックス

5月24～26日　全国産業安全衛生大会が福岡県で開催され、総務課玉村公一・調査研究部比田井民子の両名が参加しました。

5月25・26日　全埋協コンピュータ等導入研究委員会が当センター会議室で開催されました。

6月8・9日　全埋協総会が静岡県で開催され、前高橋初男常務理事が「全埋協に関する功績が著しい」ということで表彰されました。

人の動き

▼4月1日付けで、渡辺正行施設係長が東京都南多摩開発本部へ転出し、その後任に同本部から長井泰紀が就任しました。

▼3月31日付けで、東京都立埋蔵文化財調査センター菊地勅所長が退職され、その後任に大崎重昭が就任しました。

発行
(財)東京都教育文化財団
東京都埋蔵文化財センター
〒206 東京都多摩市落合
1-14-2
☎ 0423-73-5296
0423-74-8044
平成元年6月30日